

## 第 7 章 遅い小学生時代 I : 1949 年頃～1952 年頃 (12～15 歳)

### 人種差別：黒人とアラブ人

人種差別ほど人の心に深い遺恨を残すものはない。フランス人はこの地にやって来た時、奴隷制を禁止した。しかしフランス人は、物事には裏と表があるとよく分かっており、当地の伝統的な人種差別の習慣には目をつぶった。彼らは、「統治するには分断せよ」との黄金律を実践したのである。駐留基地の隊長も、カイドの影響力の大きさを熟知しており、地元社会で何かいざこざが起こっても、見て見ぬふりをするのが常だった。カイドはカイドで、隊長が何も言わないのをいいことに、この地の本当の主（あるじ）は自分だと驕り高ぶっていた。この時代、人間には優劣があるというのが、まだまだ支配的な考え方だった。こうした因習に従って、カイドは、黒人の男にだけ、月に一度か二度フランス人の文民や軍人の所で無料奉仕せよと命じた。私も、まだ学校に通う子供だったが、学校が休みの木曜日にこの労役をさせられた。私は、これは受け入れがたいあからさまな差別だと思った。結局ユーゴ先生が介入してくれて、私はこの労役を免れることができた。この顛末の詳細については、西ティディケルトに関する章で述べたい。

この強制労役の事件があった頃、アウレフは再び飛蝗の被害に見舞われた。私の近所の家々の子供たちも、とても栄養状態が悪く、尻など肉がそげて骨が浮いて見えるほどだった。最近では、エチオピアなどで飢餓に苦しむ人々の映像が記憶に新しいが、その昔はアウレフでも同じような惨状が展開していたのである。ナツメヤシの木では、デーツがなり始めると、生育の悪い実は自然と落ちてしまう。そうすることによって、他の良い実によく栄養が行き渡るようにするのである。この熟し損ないの実のことをノディ (Nohdi) と呼ぶ。飢饉の時人々は、この落ちた実をも食糧の足しにするために拾い集めたが、それらはとても苦く不味いので、良いデーツの粉を 2～3 つまみ混ぜ、味覚を騙して食べた。この飢饉の期間、労働者の賃金はひどく下がり、大の男が何時間も働いて、デーツ一掴みを買うのがやっとという有様だった。





チャーダラーと呼ばれる籠：保存用の砕いたデーツを入れておくのに用いられる。写真の籠は 100 年に渡って使われてきた「骨董品」。籠に手を伸ばしている人物は著者のハジ氏。(2002 年記者撮影)

この時代を象徴する次のような話が残っている。ある富裕な家から一人の死者が出たので、人々はその棺を肩に担いで墓地まで運んで行った。葬列の後には、その家の女の召使いが、頭の上に、10 ガサス（約 20 キロ相当）ものデーツを入れた籠を載せて従った。その召使いは、一定距離進むごとに、籠から一掴みずつデーツを取り出し、地面に撒いた。子供たちが行列の後を付いて行き、地面に散らばった実を我先にと拾い集めた。私はこれに加わらなかったが、学校仲間が何人かその場において、デーツは籠に山盛りに入っていたとか、俺は腹一杯食べたとか、なんてラッキーだったとか言っていた。この凄惨な時代を伝えるエピソードはもう一つある。あえて名前は伏せるが、ある女がある日、自分の家の使用人に対して激怒した。彼らは、飛蝗が襲来しているのに、この女の農園へ駆けつけなかったと言うのだ。この使用人たちは、元は女の家の奴隷だった。怒った女主人は、火の付いたナツメヤシの松明を手を持って、召使いたちの家の部屋から部屋へと火を付けて回った。幸い、ボロ布やナツメヤシの繊維で作った敷物を焼いたくらいで大した被害はなかった。被害者たちはカイドに訴えた。しかし、カイドは、犯人の女の従兄弟で、彼女と考えを同じくしており、こう言った「お前たち、飛蝗が襲ってきていると言うのに、何故家にいたのだ？主人の言うことに従うべきだろう。」



ナツメヤシ農園：デーツを収穫するだけでなく、木と木の間で、極度に日が照り付けられない環境を利用して他の作物も栽培する。(2002 年記者撮影)

### 学校に協同組合が出来る

学校の授業が軌道に乗り出すと、学校内に協同組合が作られた。ユーゴ校長が名誉会長になり、実務を取り仕切る委員長には賛成多数で私が選出された。全生徒が加入を義務付けられ、会費を払った。毎週木曜の午後は皆で郊外に出かけ、珪化木（訳注：樹木の化石）の欠片や、「沙漠のバラ」（訳注：赤褐色のバラの花状の石膏石）、鏟（やじり）など石器時代の遺物、それにきれいなネックレスを作るためのエスカルゴの殻などを拾い集めた。砂嵐が吹き荒れたりして天候が悪く外に出られない時は、学校の工房に籠り皮細工の作製にいそしんだ。この頃私の父はアウレフにいて、農業の傍ら革職人をしており、私もよく仕事を手伝ったので、私の皮細工の腕はちょっとしたものだった。通学に使う鞆も自分で作ったほどである。従って工房では、私は教え役だった。なお、必要な材料は町の役所が供給してくれた。

そうこうするうちに、校長のユーゴ先生は、フランスのオセール（Auxerre）地方のシャンプーラン（Champoullains）という町の学校と私たちの学校とを姉妹校協定させることに成功した。オセールはユーゴ先生の出身地だった。双方の学校は、まずお互いの学校新聞を交換することから始めた。私たち生徒はにわかに、姉妹校の誰かと文通できるように、もっとフランス語を上達させたいと頑張り始めた。私も、協同組合の委員長の名誉にかけて、仲間が遅れをとるまいと必死に勉強した。私たちの協同組合は学校新聞に、注文をくれば工房で作成した商品を発送しますと言う広告を載せていたので、この通販のことは姉妹校も知るところとなった。商品の値段はごく安かったので、注文に生産が追い付かな



いほどの人気となった。校長先生は役場の長でもあるフランス軍の隊長と懇意だったので、地元の職人たちも私たちの協同組合の販売網を利用して販売を拡大させられないか話し合った。合意が成立し、注文には地元の職人たちも応えることになったので、私たち生徒の工房は一息つくことができた。なお、商品は書留の郵便小包で発送され、支払いには、学校の協同組合宛に小切手を切ってもらった。

組合のメンバーは、5～6 人の班に分かれて活動した。各班の班長は、毎週どれくらい仕事はかどったか報告する決まりだった。組合の執行委員会は毎月一回招集され、活動が上手くいっているかを検討した。私はこの執行委員会の仕事の他、各班の活動のチェックや月刊の学校新聞の編集にも携わっていたので、目が回るほど忙しかった。ところで、協同組合の工房で、革製品を扱うことになった経緯は、こんな具合である。前述のように、この頃私の父は革職人をしており、私には、道具のことはもちろん、皮細工に必要なことの全てを教えてくれた。これは実に興味深い作業で、父の指導の下、私は革職人のノウハウを習得して行った。私が作ったのは、革製品の中でも細々したもの、具体的には、サンダル、煙草入れ、キーホルダー等だった。こうして作ったものを校長先生に見せたところ、校長先生は何か閃いたらしく、駐留軍の隊長に相談をもちかけ、皮細工に必要な工具や材料を提供してもらえないかと頼んだ。役所からはすぐに好意的な返事がもらえ、間もなく学校の工房はちょっとした革製品の工場ようになった。生徒は、それぞれの能力に応じて商品作りにいそしんだ。そして皆自信を持つようになったものである。「自分はこれだけのものが作れるのだ！」と。

シャンプーランの姉妹校は、私たちの学校にアルコール燃料で動く印刷機を寄贈してくれた。この機械を動かすのは中々骨の折れる仕事だったが、私たちはこれを使って印刷できるのがうれしくて仕方なかった。私たちは初め、月刊の学校新聞を印刷することから始めたが、この新聞は後に週刊になった。私たちの新聞は地元社会でも好評で、読者の中には新しい版が売り出されるのを待ちきれずに、学校まで貰いに来る者もあったくらいである。新聞は地元で販売された他、フランスの姉妹校には無料で送付された。また、組合が発送する商品の小包の中にも一部ずつ同封された。新聞の内容は、学校の授業や課外活動の様子の記事や、私たちの工房の商品の広告などだったが、記事を書くのは、生徒たちにとって、習ったフランス語を実践するいい機会だった。一方で、私たち生徒のフランス語は、自在に記事を書くには、まだまだレベルが不十分だった。最終的には学校の先生たちが記事の添削をしてくれたが、先生たちは私たちに、まずは自分で何回も手直しをしなさいと言った。なお、記事のテーマがデリケートな性質のものであった時は、先生たちから「君たちの年齢ではまだ早いよ」と注意された。学校新聞も、フランス当局の検閲の対象となっており、実際の治安や政治について言及すると発行の許可が下りなかった。その一方で、アウレフの駐留軍の隊長からは、組合の活動を讃える表彰状をもらい、私たちはそれをたいそう誇らしく感じて教室の壁に張り出した。

## 課外活動

木曜と月曜は授業がなかったので、皆で郊外へ出かけた。当時生徒の人数は 40 人不足だったが、中に一人だけ女の子がいた。彼女の父はフランス本国からやってきたフランス人で、ポンスさん (Ponse) といい、アウレフの飛行場で技師として働いていた。この時代、アフリカ大陸北部から南部へ向かう飛行機は、給油のためここアウレフに立ち寄った。このポンスさんは、他ならぬ、私の叔母のアイーシャと結婚し娘をもうけた。その子、つまり私にとっては従姉妹が、その唯一の女子学生である。ポンスさんは、私たちが学校へ入った当時は、もうフランスに帰国していて、この地にはいなかった。学校の外へ出かける活動は、いつも午後だったが、校長のユーゴ先生がいつも生徒たちに付いて来た。先生は、課外活動に参加したい生徒は前もって親の承諾をもらっておきなさいと、いつもくどくど念押ししたものである。私たちは歩いて先史時代の鍛冶場の跡へ行き、そこへ着いた後はめいめい好きなところに散らばり、何かめぼしいものがないか注意深く地面の上を探し回った。そして、何か、これはと思うものを見つけると、すぐユーゴ先生の所へ見せに飛んで行った。そこで拾えたのは、石の針や矢じり、ナイフ、斧、角が取れて丸くなった杵などだった。ユーゴ先生は収集物を吟味して、これは籠に入れなさい、これは置いて行きなさい、と指示を与えた。戦利品はとりあえず学校の展示室へストックし、天候が悪くて課外活動が出来ない時に整理や分類を行った。ユーゴ先生は、こうした先史時代の遺物の収集を、歴史の学習のまたとない機会と考えていたようだ。